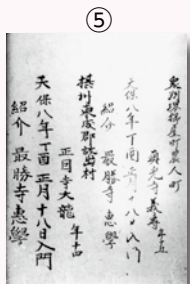
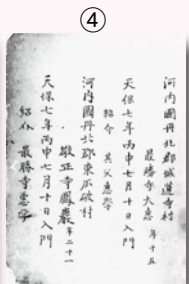
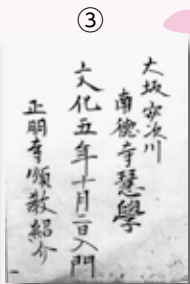
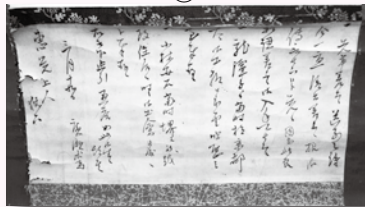


## 咸宜園に学んだ最勝寺恵学

西田 孝司  
(松原市文化財保護審議会)



『入門簿』に記された恵学の入門(③)  
『入門簿』(亦楽編)に記された恵学紹介の最勝寺大恵と敬正寺鳳巖(④)、真光寺義専と正因寺大龍(⑤)  
いずれも日田市・財団法人廣瀬資料館蔵

廣瀬淡窓が恵学に送った五言律詩(①)と手紙(②)  
いずれも天美北5丁目・最勝寺蔵

### 日田の廣瀬淡窓が送った 恵学への詩と手紙の発見

江戸時代末期、城連寺村の真宗大谷派の最勝寺(天美北五丁目)では、恵学が本堂を再建するなど寺の維持に努めました(『歴史ウォーク』192)。

恵学は、九州・日田(大分県)の有名な私塾である咸宜園で学んだ経歴があり、最近、その関係資料が最勝寺で見られたので紹介します。

咸宜園は、文化二年(一八〇五)、儒学者であり、詩人であった廣瀬淡窓が長福寺(真宗大谷派)で開いた学寮に始まります。淡窓は、年齢・身分・学歴を問わず門下生を平等に教育しました。明治三十年(一八九七)に閉塾するまでの九十二年間、隠岐(島根県)と下野(栃木県)を除く全国六十六ヶ国から五〇〇〇名の入門者があったといわれています。河内では十八人、摂津で一三八人、和泉も二五人を数えました。兵学者の大村益次郎や蘭学者の高野長英、内閣総理大臣となった清浦奎吾も門下生です。淡窓が弘化二年(一八四五)〜嘉永三年(一八五〇)の間に回想した自叙伝『懐旧樓筆記』には、恵学を次のように記し

ています。

「恵学ハ大坂アチ川南徳寺ノ僧ナリ。幼クシテ塾ニ来レリ。在塾三年ニシテ帰ル。遠思樓集中ニ。送別ノ詩ヲ載セタル是ナリ。京撰ノ人。予力門ニ入ル者。此僧ヲ以テ始トス。今河内最勝寺二住セリ」

これによると、恵学は大坂安治川の南徳寺(野田新家村。現大阪市福島区吉野)だが、今は茨木市に移転。真宗大谷派の僧。幼年のころ三年間学び、帰る際に淡窓が送別の詩を贈ったことが淡窓の詩文集『遠思樓詩鈔』に載せられています。恵学は京都や大坂から入門した最初の人で、今は最勝寺にいと見えます。

門下生の入塾を記した『入門簿』では、恵学(原本は慧学)は文化五年(一八〇八)十月二日に、正明寺の順教の紹介(保証人)で入門したとあります。恵学は文化元年(一八〇四)の生まれで、この時わずか五歳でした。『懐旧樓筆記』に記すように、三年間、八歳まで日田で学問にいそしみました。のち、恵学は、南徳寺を出て、最勝寺の養子となるのです。その最勝寺の調査で、『遠思樓詩鈔』に収録された、淡窓が恵学に贈った五言律詩が掛軸にされて出てきたのです。

詩鈔には「送恵学帰撰」「負笈来千里三年業已成 僑居諱鄙事 孤客解人情 旧誼先花别 春帆與雁行 貽君有烟草 聊表相思名」とあって、軸物は後半部分が少

し異なりますが、原物が見つかったことは驚きでした。

掛軸の下には、淡窓が詩を送ったのち、恵学に宛てた手紙も貼られています。淡窓の通称である求馬の名で、三月十九日(年次不詳)とあります。淡窓の門下生であり、のち堺に住んだ小林安石のことも記しています。

恵学が最勝寺住職として、寺観を整えていた天保七年(一八三六)、淡窓の弟で、二代塾主となった廣瀬旭荘が五月に日田を出て、堺の安石の宿屋町山之口(堺区)に下宿することになりました。旭荘は七月一日から、淡窓の『遠思樓詩鈔』などをテキストとして、近くの専修寺(堺区神明町。明治期に大阪市に移転。浄土宗)を借りて咸宜園の講義を始めるのです。

七月十日、恵学は早速、息子の大恵(十五歳)と東瓜破(大阪市平野区)の敬正寺鳳巖(二十一歳)を旭荘塾に入門させました。翌天保八年正月十八日にも、堺柳屋町の真光寺(堺区戎之町東に移転)の義専(十五歳)や放出(大阪市鶴見区)の正因寺大龍(十四歳)を紹介しています。いずれも真宗大谷派の僧で、咸宜園の『入門簿』(亦楽編)にその記録があります。

恵学は、淡窓や旭荘が実践した「咸宜」(すべてのことがよろしい)の教えを幼くして受け、それを多くの人々に広めようとしたのでした。